

# 住生活環境と心理的ストレスに関する研究 —住まいに係わる近隣ストレス尺度の構成—

山内宏太郎

## 1. 研究目的

日本における集合住宅の建設は1955年頃（昭和30年）に始まる。その後およそ半世紀にかけて、集合住宅の建設は増加の一途をたどってきている。この傾向は大都市においてはもちろんのことであるが、地方の都市化居住地域の一般的傾向として広くみられるものであり、その範囲は更に拡大する傾向にある。

日本における住宅の歴史のなかではまだ始まったばかりであると言ってよい積層集合住宅が、一般の住宅として定着しつつある背景としては、周知のごとく産業や情報ネットワークの異常な集中などによって結果的に生じる人口の集中化に代表される、地域社会の構造的変化を挙げなければならないであろう。このような都市型住宅の集合住宅化は、生活地域における土地の有効利用に対する社会的要請の増大と関連しながら、今後更に進展していくことが予想されている。このような地域社会の構造的変化、住宅のあり方や住居形態の変化に伴い、そこで生活する住民個人のもつ集住生活に対するあり方や意識も今後大きく変化していくことが予想される。家族形態の多様化、生活に係わる意識や価値観の多様化は、人々の生活空間に対する要求や評価に大きな影響を与え、より高度で多角的にみた住宅の質に係わる検討を求めていると言ってよいであろう。

これまで主査らは、都市型住宅として定着した低層から高層・超高層集合住宅の居住者を調査対象（主婦）として、住居を中心とした物理的な住環境に関する心理的評価の1つの指標である「住環境ストレス(Residential Environment Stress)」に関する一連の研究<sup>文1), 4)~9)</sup>を行ってきた。これらの研究では、住環境ストレス評価尺度を使用して、住宅、主として集合住宅の物理的特徴を6つの機能に分類し分析を行ってきた。すなわち、安全性機能、利便性機能、空間設計機能、空間の広さ機能、居住環境機能、及び、視環境機能に代表される住空間機能の心理的評価に焦点を当てながら、心理的ストレスという観点から集住生活における住宅の質はどうあるべきかについて検討してきた。

本研究は、これらの研究で得られた知見を基礎にしながら、集住生活のもう1つの側面である近隣の人間関係を含めた心理的・社会的側面から住宅の質・生活環境を

評価することを目的としている。すなわち、積層・高密度の集住生活が特徴である都市型住宅では、ともに生活することから生じる様々な近隣関係に係わるストレスに囲まれている。例えばプライバシー意識、なわばり意識、コミュニケーションの問題などを含む近隣住人との関係のあり方は、日常生活のストレスとして大きな比重を占めていると思われる。また、集住生活で共有される近隣からの生活音（近隣騒音など）も近隣関係に係わる重要なストレスとみることができる。この近隣騒音は、本来物理的ストレスであるとはいえ、騒音を聞く側の人間が感じる被害感（ストレス）の度合いが、騒音を出す側の人間との間にどのような心理的・社会的関係が維持されているかによって異なってくるという研究結果<sup>文3)</sup>に示されるように、物理的ストレスである騒音も近隣関係の問題としてとらえることができるからである。これまで、集合住宅の建設の増加に伴い、近隣関係そのものを単に社会学的な側面からとらえようとする研究から集合住宅の構造的形態や物理的特徴が近隣交際の広がりを与える影響についての研究に至るまで、集合住宅と近隣関係に関する様々な研究がなされてきている。しかし、集合住宅の質をそこでの近隣生活に係わる心理的ストレス（ともに生活することから生じる生活上のストレス）の観点からとらえようとした研究はこれまでのところほとんど見当たらない。したがって、本研究では集住空間に係わる心理的・社会的住生活環境の評価法（近隣ストレス尺度、仮称）を構成するための基礎的資料を得ることを目的として行われる。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査地区・調査住棟

本分析に使用された調査対象団地は、継続調査可能な宮城県仙台市宮城野区内に立地する3団地を使用した。3団地とも公団賃貸住宅で、敷地が周辺地域と明確に区別されている点が共通している。

イ団地は、1971年度（昭和46年度）竣工で、5階建て、20棟、総住宅戸数は530戸、住宅の形式は2DK及び3K、1戸当たりの床面積は38.2~43.4㎡、階段アクセス方式、及び駐車場収容台数は約300台、そして、団地専用集会場を有する。

ロ団地は、1972年度（昭和47年度）竣工で、5階建て、11棟、総住宅戸数は360戸、住宅の形式は2DK及び3K、1戸当たりの床面積は38.2～43.4㎡、階段アクセス方式、駐車場収容台数は約130台、そして、団地専用集会場を有する。

ハ団地は、1977年度（昭和52年度）竣工、11階建て、3棟、総住宅戸数は451戸、住宅の形式は2DK、3DK及び4LDK、1戸当たりの床面積44.9～87.5㎡、廊下アクセス方式、駐車場収容台数は約230台、そして、団地専用集会場を有する。

なお、イロの両団地は団地の物理的特性において大きな差がないために、本分析では以降、1棟の規模の小さな両団地をA団地、また、1棟の規模の大きなハ団地をB団地と呼ぶことにする。

## 2.2 調査対象者

上記の各団地に居住する女性（N=415）を対象に調査が実施された。本報告において分析対象となる被験者は、核家族、専業主婦（パートタイム形態の勤務者を含んでいる）、年齢が20歳代から60歳代までの範囲、同居の子どもがいる場合は最年少子の年齢が11歳未満である被験者に限定した（N=205）。分析の対象者となった主婦の年齢は、A団地では平均37.7歳（中央値34.0、範囲24-69）、B団地では平均35.7歳（中央値32.5、範囲21-68）であった。また世帯主の年齢は、A団地では平均39.5歳（中央値36.0、範囲24-73）、B団地では平均39.0歳（中央値37.0、範囲26-69）であった。家族数は、A団地は平均3.8人（中央値4、範囲3-6）、B団地は平均3.9人（中央値4、範囲3-6）であった。同団地における居住年数は、A団地では平均83.1か月（中央値63、範囲1-282）B団地では平均51.9か月（中央値42、範囲5-171）であり、団地の完成年度の違いを反映している。

## 2.3 調査方法

本調査は、質問紙を使用した留置法による社会学的調査法によって行われた。調査対象団地の管理事務所による調査実施許可を得た後、調査員（大学生）が直接に各調査対象団地の住戸を戸別に訪問し、調査の依頼と質問紙の説明を行い、後日指定された日時に再度戸別に訪問し、回答済みの調査票の回収を行う方法が採られた。なお、一部の回答済み調査票の回収は、別途郵送によって行われた。

訪問調査は、1993年8月24日から29日、及び、同年9月6日から12日にかけて行われ、同期間に回収が行われた。また、同期間に回収できなかった調査票の一部は、対象者の好意で郵送によって回収された。なお、A、B両団地の調査対象数、回収結果は、表2-1に示す通りである。

表2-1 回収結果

( )内は%

対象団地	調査対象数	回収数	分析対象数
A団地	210	127 (60.5)	121 (57.6)
B団地	205	101 (49.3)	84 (41.0)
合計	415	228 (54.9)	205 (49.4)

## 2.4 調査項目

本研究において使用された調査票の構成は、以下の通りである：

- ①フェース項目（家族構成、本人と世帯主の年齢、職業形態、最終学歴、最年少子の年齢と性別、居住月数）
- ②住居特性に関する項目（間取り、部屋数、専有面積、所有形態、居住階）
- ③住意識と住評価に関する項目（住み心地評価、地域愛着度、団地愛着度、地域永住意識、団地永住意識、転居予定、生活満足度評価）
- ④生活構造と生活意識に関する項目（外出頻度、外出理由、外出自由度、近所つきあいの程度、近所つきあいの好嫌度、プライバシー意識、近隣問題への対処方法）
- ⑤近隣ストレス尺度（団地内の人間関係を背景にしたトラブル・イベント50項目に対する心理的負荷の5段階評定尺度による近隣生活困難度）
- ⑥本人または家族による近隣に対する迷惑行為尺度（近隣ストレス尺度のトラブル・イベント50項目に対応する本人または家族による迷惑行為の有無と行為をしたときの気がねの程度に関する5段階評定尺度）

## 2.5 分析方法

### 1) 近隣ストレス・トラブル・イベント発生率と反応率

近隣ストレス尺度を構成するトラブル・イベント50項目（本分析で使用された項目数は42項目）は、本研究の予備調査<sup>2)</sup>において使用された34トラブル・イベントを基礎にし、1992年8月から1993年5月にかけて、全5地域（東京都、千葉、山口、愛知、及び宮城の各県）の団地住民30人（専業主婦）に対する詳細面接法を通して得られたトラブル・イベント16項目を加えたものである。

トラブル・イベント発生率は、各イベント（出来事）の経験についての5段階評定尺度（0.イベント自体の知覚経験がない場合、1.イベントの経験はあるが何ともなかった、2.やや大変だった～5.非常に大変だった）のうち、「1.イベントの経験はあるが何ともなかった」レベル以上で反応したもの、すなわち、経験をしたイベントを「反応あり」とし、全対象者の回答総数を100として、そのなかで占めるその割合（%）を示したものである。

トラブル・イベント反応率は、各イベントの経験について、その経験が自分自身にどの程度大変であったかに対する5段階評定尺度のうち、「2.やや大変だった」レベル以上で反応したもの、すなわち、何らかの心理的負荷を経験したトラブル・イベントを「反応あり」とし、全対象者の回答総数を100として、そのなかで占めるその割合(%)を示したものである。(なお、今回の分析では、この反応率が5%以下のトラブル・イベントは統計的分析から除外された。なお結果的に本分析で使用されたトラブル・イベント数は42である。)

2) 近隣ストレス・5 カテゴリーとカテゴリー別得点と総得点

近隣ストレス・カテゴリー別得点は、42の近隣ストレストラブル・イベントをイベント内容から5サブグループに分類し、そのサブグループごとにトラブル・イベントの評定値を合計した値である。なお、分析では、各カテゴリーごとの合計値を標準得点(mean=10, SD=2)に変換した値をカテゴリー別得点として使用した。また、全トラブル・イベントの評定値の合計値を同じように標準得点に変換した値を総得点として使用した。また、なお、近隣ストレスを構成する各トラブル・イベントは、以下の5カテゴリーに分類された：①子ども行為音(5イベント)、②生活行為音(13イベント)、③プライバシー・テリトリー(9イベント)、④近所つきあい(9イベント)、⑤モラル・ルール(6イベント)の各カテゴリー。カテゴリーごとのイベントの内容は、3章の表3-2に示される通りである。

3) 迷惑行為尺度イベントの行為率と気がね率

行為率は、各イベントについて自分または家族が行ったことがあるか、また、そのときに近隣に対してどの程度気がねをしたかについての5段階評定尺度(0.イベント自体したことがない場合、1.イベントの行為をしたが気にならなかった、2.やや気にした~5.非常に気になった)のうち、「1.イベントの行為をしたが気にならなかった」レベル以上で反応したもの、すなわち、行為をしたイベントを「反応あり」とし、全対象者の回答総数を100として、そのなかで占めるその割合(%)を示したものである。

4) 迷惑行為イベント・5 カテゴリー

迷惑行為イベントは、上述の近隣ストレストラブル・イベントに対応している。したがって、迷惑行為イ

ベント42項目を近隣ストレストラブル・イベントと同様に5サブグループに分類し分析に使用した。カテゴリーごとの迷惑行為イベントの内容は、3章の表3-3に示される通りである。

5) 統計手法

データの統計的解析に際し、A、B団地間の発生率と反応率、及び、行為率と気がね率の差の分析には、カイ自乗検定を使用した。また、近隣ストレス度、近隣ストレス・カテゴリー別得点に対する各要因の寄与の分析には、数量化理論I類を使用した。なお数量化理論I類の分析には、「SAS Technical Report J-109:数量化I・II類サンプルプログラム」を参考に、Statistical Analysis System(SAS)、UNIX版(SUN OS)Ver.6.07のGLM Procedureを使用して行った。

3. 結果と考察

3.1 地域生活行動と住生活意識

近隣ストレスは、地域生活と地域社会の人間関係を基礎にしていると考えるので、ここではまず対象者の地域生活行動(近所つきあいの程度、近所つきあいの好嫌

### 3.1 地域生活行動と住生活意識

#### 3.1 地域生活行動と住生活意識

近隣ストレスは、地域生活と地域社会の人間関係を基礎にしていると考えるので、ここではまず対象者の地域生活行動(近所つきあいの程度、近所つきあいの好嫌

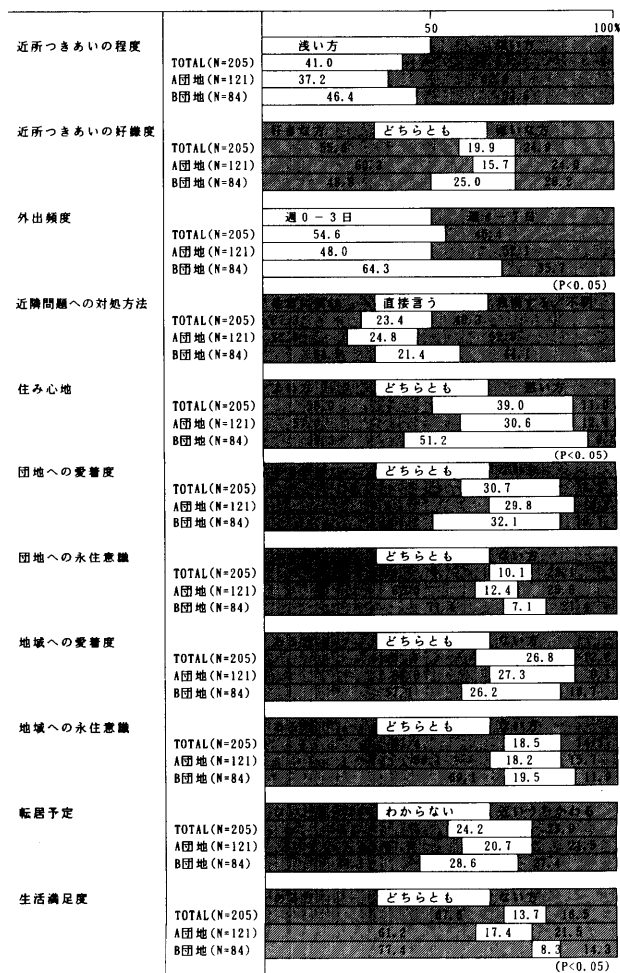


図3-1 全体(N=205)、A団地(N=121)及びB団地(N=84)の地域生活行動と住生活意識

表3-1 地域生活行動と住生活意識の各項目間の一致度係数

	住み心地	団地への愛着度	団地への永住意識	地域への愛着度	地域への永住意識	転居に対する意識	生活満足度
近所つきあいの程度	0.096	0.189*	0.107	0.144	0.075	0.102	0.043
近所つきあいの好嫌度	0.316***	0.329***	0.235*	0.213*	0.142*	0.088	0.146
外出頻度	0.172*	0.173*	0.168	0.149	0.170*	0.076	0.126
近隣問題への対処法	0.118	0.155	0.199	0.049	0.023	0.032	0.141

(\*\*\* P<0.001 \*P<0.05)

度、外出頻度、近隣で問題が生じたときの基本的な対処方法)と住生活意識(住み心地、団地と地域に対する愛着度と永住意識、転居予定、生活満足度)についての結果を述べる(図3-1)。全体(N=205)の地域生活行動の各項目をみると、近所つきあいが好きな方で、「お互いに家に上がって談笑するような関係のつきあい以上」をしているものが5割以上である。また、外出頻度は、1週間のうち4日以上と以下がほぼ半々である。近隣との間で生じたトラブルへの対処方法は、半数が「問題がこじれるだけで解決にならないので我慢するか、分からない」と回答している。残りの半数ずつが「他者・自治会などに頼む場合」と「直接にトラブルの相手に言う場合」である。A、B団地間の比較では、統計的に有意な差があった項目は外出頻度だけであった。すなわち、A団地はB団地と比較して外出の機会が多い傾向にあった。このことは、6歳未満の未就学児の割合がA団地は45%、B団地は55%であることに関係し、低年齢の子どもがいることで比較的住宅内部にすることが多くなるからではないだろう。

全体(N=205)の住生活意識の各項目をみると、まず自分の団地と生活地域に対する愛着度、永住意識とも5割以上が「ある」と回答し、全体的に現在の生活の場に対して親しみをもっていていると言える。したがって、現時点で転居を考えるものは少なく、住み心地もよく、生活全体に対して満足している傾向が明らかである。A、B団地間の比較では、統計的に有意な差があった項目は「住み心地」と「生活満足度」であった。理由は今回の調査では明確ではないが、B団地はA団地と比較して、全体として今の生活に満足するものが多く、また、住み心地は逆に満足するものがやや少ない傾向にあった。しかし、不満と感じているものの数はともに少なく、基本的には両団地ともここでの住生活に対する満足度は高いと言える。表3-1に、地域生活行動と住生活意識の各項目間の一致度係数を参考のために示した。項目間の関係の強さを示す係数の値は全体的に低いが、「近所つき

あいの好嫌度」は、一般的に住生活意識との間に関係がみられる。近隣との人間関係をもつことを好むものは地域生活に密着した意識をもつ傾向にあると言える。

### 3.2 近隣ストレストラブル・イベントの発生率と反応率

表3-2は、全体(N=205)、A団地(N=121)及びB団地(N=84)におけるトラブル・イベント42項目の発生率と反応率を示している。全体において、高発生率イベントの上位10位に、音(騒音)に係わるイベントが大半を占めていることが分かる。このような傾向は、日常の近隣関係のなかで、音に係わるイベントを比較的多く経験する傾向にあることを示している。イベントに対して何らかの心理的困難さを示す指標である反応率をみると、同様に音に係わるイベントが多くを占め、騒音が近隣の日常的問題として最も顕著であることが分かる。その他の反応率が高いイベントとしては、「32.自治会の役員」「35.ごみ出しのルールを守らない人」「38.つば吐き、タバコの投げ捨て」といった集住生活の役割分担(つきあい)やモラル・ルールに属するイベントが挙げられる。

また、団地間の比較では、「9.自動車などの出し入れ音」「13.洗濯の音」「14.ドアの開閉音」「19.布団たたきの音」

表3-2 近隣ストレストラブル・イベント発生率と反応率(%)

トラブル・イベント	①-⑩は順位					
	発生率			反応率		
	A(N=121)	B(N=84)	TOTAL(N=205)	A(N=121)	B(N=84)	TOTAL(N=205)
1. 子ども行為音						
1. (上下階や隣から) 子どもの飛び跳ねる音が聞こえる	71.9	82.1⑩	76.1⑩	52.0⑩	55.9⑩	53.7⑩
1. (上下階や隣から) 子どもの遊び声や泣き声が聞こえる	81.8⑦	78.6⑩	80.9⑨	45.4⑩	44.0⑩	44.9
3. (住棟周辺や道路から) 子どもの遊び声や泣き声が聞こえる	85.9①	80.5②	83.7①	54.3⑩	44.0⑩	50.2⑤
4. (共有部分から) 子どもの飛び跳ねる音が聞こえる	77.7⑤	75.5	76.6②	41.3	44.0⑩	42.4
5. (共有部分から) 子どもの遊び音が聞こえる	87.6④	88.1③	87.8④	44.6	47.7⑦	45.9⑧
2. 生活行為音						
6. (上下階や隣近所から) テレビ、ラジオ、ステレオの音が聞こえる	39.7	41.7	40.5	16.5	22.6	19.0
7. (上下階や隣近所から) ピアノなどの楽器を演奏する音が聞こえる	46.3	57.1	50.7	19.8	22.6	21.0
9. (駐車・駐輪場から) 自動車、自転車、バイクの出し入れ音が聞こえる	61.7④	76.2	65.4⑥	52.0⑩	45.2	49.8
10. (上下階や隣から) 台所・風呂・トイレの給排水の音が聞こえる	80.9①	88.1③	89.8①	55.3⑩	56.8⑩	50.0①
12. (上下階や隣から) 掃除(機)の音が聞こえる	59.5	56.0	58.0	23.9	21.4	22.9
13. (上下階や隣から) 洗濯(機)の音が聞こえる	47.5	52.4	65.9	33.0	33.3	33.2
14. (上下階や隣から) ドアの開閉音が聞こえる	65.9①	85.7①	81.7②	52.0⑩	44.0⑩	48.8⑦
15. (上下階や隣から) 床を歩く音が聞こえる	71.1	82.1⑩	75.6	42.9	50.0⑩	45.9⑧
16. (上下階や隣から) 電話の音や話し声が聞こえる	34.7	39.3	36.6	25.6	25.0	25.4
18. (上下階や隣から) 机やいすを動かす音が聞こえる	47.1	57.1	51.2	22.3	30.9	25.9
19. (上下階や隣近所から) 布団たたきの音が聞こえる	45.9①	88.1③	82.7②	46.2⑩	36.9	42.4
20. (共有部分から) 立ち話の音が聞こえる	47.6②	59.5	69.8	29.7	23.8	27.3
21. (共有部分から) 足音が聞こえる	76.0③	70.2	73.7	30.5	25.0	28.3
3. プライバシー・テリトリー						
22. 私の家のことについて、近所でちょっとした話題になることがある	18.2	23.8	20.5	9.0	3.5	6.8
23. 私の家のことについて、近所の人から干渉されることがある	16.5	16.7	16.6	9.0	10.7	9.8
25. 私の家の玄関前の廊下で立ち話をする人がいる	21.5	23.8	22.4	8.2	8.3	8.3
26. 私の家の玄関前の廊下に物を置かれたり、汚されたりする	19.8	16.7	18.5	15.7	13.1	14.6
40. 玄関前に出前のどんぶりなどを置く人がいる	47.7	57.1	66.3	26.4	15.4	22.0
41. 共有部分に自分の物を出されている人がいる	40.0	40.5	42.0	22.3	15.4	19.5
44. 外廊下に掃き掃除などが出されていることがある	*11.6	52.4	28.3	* 5.7	20.2	11.7
46. 部屋のなかが外から見られてしまうことがある	42.1	31.0	37.6	33.0	23.8	29.3
47. 他人の家のなかが見えてしまうことがある	43.8	39.3	42.0	23.1	16.6	20.5
4. 近所つきあい						
24. 近所の人に不意に訪問される	*25.6	44.0	33.2	9.0	13.1	10.7
27. 表札を出さない人がいる	*41.3	85.7①	59.5	24.7	35.7	29.3
28. 近所の人に宗教に勧誘されたり、物をセールスされることがある	37.2	41.7	39.0	25.6	33.3	28.8
29. 近所の人に買物に誘われることがある	27.3	35.7	30.7	4.9	7.1	5.9
30. よし顔を見かけてもあいさつをしない人がいる	*46.3	72.6	57.1	*24.7	41.6	31.7
31. 自治会(管理組合)で行う作業(大掃除、草むり)がある	61.2	53.6	58.0	42.9	51.9	46.3
32. 自治会の役員が定期的に回ってくる	70.2	67.9	57.1	55.3⑩	57.1⑩	56.1⑩
33. サークル活動に勧誘されることがある	24.0	29.8	26.3	11.5	11.9	11.7
49. 宅配便を預かったり、預けられたりする	*64.5	46.4	57.1	25.6	15.4	21.5
5. モラル・ルール						
34. 自転車、三輪車、バイクが放置してあることがある	59.5	63.1	61.0	40.5	35.7	38.5
35. ごみ出しのルールを守らない人がいる	*70.2	87.8①	81.3②	54.3⑩	61.9⑩	57.6②
38. つばを吐いたり、タバコの投げ捨てをする人がいる	58.8	59.5	59.0	48.7⑩	40.4	45.4④
39. 周辺の道路などに放尿する人がいる	*18.2	31.0	23.4	11.5	16.6	13.7
42. 子どもが郵便受けにいらすることがある	23.1	21.4	22.4	16.5	14.2	15.6
50. 共有部分の掃除をしない人がいる	40.5	27.4	35.1	6.6	8.3	7.3

(\* P<0.05)

「20.立ち話の声」など音に関するイベントは、A団地において発生率が有意に高い傾向にあった。また、「24.不意の訪問」「27.表札を出さない人」「30.あいさつしない人」「35.ごみ出しのルール違反」「44.外廊下に植木鉢などを出す」などの近所つきあいの仕方や集住生活の規範に係わるイベントは、B団地において有意に高かった。しかし、反応率においては「30.あいさつしない人」「44.外廊下に植木鉢などを出す」を除いて、A、B団地間には有意な差はなかった。

以上の結果にみられるように、「騒音」「モラル・ルール」「自治会の役割分担」における反応率の高さは、これらのカテゴリにおけるトラブル・イベントに係わる心理的ストレスが、集住生活における慢性的で、大多数の居住者に共通した問題であることを示すと思われる。これらの傾向は、主査らによって行われた超高層集合住宅に関する研究で見いだされた結果<sup>文2)</sup>と一致している。特に高反応率が集中している近隣騒音に係わるカテゴリのトラブル・イベントに関しては、集合住宅という超隣接・積層化された住空間では避けることが困難な状況にあると言える。しかし、これらの近隣騒音と呼ばれる音は地域生活、日常生活をする以上必ず出る音、言わば生活音であり、初めから騒音であったわけではないことがこの問題を考える上で重要である。すなわち、他人の出す生活音を聞く人が「あって欲しくない音」「邪魔な音」と知覚することで初めて騒音ということになる。この意味では物理的な音(騒音)の特性や居住条件よりも、生活音の加害者(音を出す側の人)と被害者(生活音を聞き、何らかの被害感、邪魔感をもつ人)との間の心理的・社会的関係のあり方、すなわち近隣同士のつきあい方がその被害感・邪魔感(annoyance)に強い影響力があると言える<sup>文3)</sup>。したがって、集合住宅での生活が近隣との人間関係において<sup>あつれあ</sup>軋轢を生じやすい密接な居住条件にある以上、近隣関係に係わる心理的ストレスを考える上で、生活騒音が最も重要な要素の1つとなってくると思われる。

### 3.3 迷惑行為イベントの行為率と気がね率

表3-3は、42のイベントに関して、自分自身または自分の家族が行為として行ったことのある割合を行為率として、また、そのイベントを行うときに近隣の人に何らかの気がねを感じたイベントの割合を気がね率として示している。全体(N=205)についてみると、トラブル・イベントと同様に、音に関するイベントを自分自身で行ったことのある人が多く、高行為率10位までのすべてが音に係わるイベントであることが分かる。また、行っ

表3-3 迷惑イベント行為率と気がね率(%)

迷惑行為イベント	行為率			気がね率		
	A	B	TOTAL	A	B	TOTAL
	(N=121)	(N=84)	(N=205)	(N=121)	(N=84)	(N=205)
1. 子ども行為音						
1. 自宅で子どもが飛び跳ねる音を出す	60.3 <sup>③</sup>	67.9 <sup>④</sup>	63.4 <sup>③</sup>	45.9 <sup>③</sup>	54.3 <sup>④</sup>	53.2 <sup>③</sup>
2. 自宅で子どもが遊び声や泣き声を出す	72.7 <sup>⑤</sup>	69.0 <sup>④</sup>	71.2 <sup>④</sup>	57.9 <sup>④</sup>	54.3 <sup>④</sup>	60.5 <sup>④</sup>
3. 住棟周辺や道路で子どもが遊び声や泣き声を出す	53.7 <sup>④</sup>	67.9 <sup>④</sup>	69.9 <sup>④</sup>	37.2 <sup>④</sup>	48.6 <sup>④</sup>	42.0 <sup>④</sup>
4. (共有部分で) 子どもが飛び跳ねる音を出す	36.4	50.0	42.0	24.8	46.4	33.7
5. (共有部分で) 子どもが遊び声を出す	49.6	53.6	51.2	44.7 <sup>④</sup>	48.8 <sup>④</sup>	46.9 <sup>④</sup>
2. 生活行為音						
6. 自宅からテレビ、ラジオ、ステレオの音を発てる	67.8 <sup>④</sup>	79.8 <sup>④</sup>	72.7 <sup>④</sup>	46.9 <sup>④</sup>	60.7 <sup>④</sup>	42.9 <sup>④</sup>
7. 自宅からピアノなどの楽器を演奏する音を発てる	32.2	41.7	36.1	19.0	38.1	26.8
9. 駐車・駐輪場で自動車、自転車、バイクの出入れ音を発てる	52.1	54.8	53.2	19.8	31.0	24.4
10. 台所・風呂・トイレの給排水の音を発てる	60.2 <sup>③</sup>	65.7 <sup>③</sup>	62.4 <sup>③</sup>	48.2 <sup>③</sup>	59.5 <sup>③</sup>	53.2 <sup>③</sup>
12. 掃除(機)の音を発てる	47.4 <sup>④</sup>	63.1 <sup>④</sup>	60.0 <sup>④</sup>	33.9	51.2 <sup>④</sup>	41.0 <sup>④</sup>
13. 洗濯(機)の音を発てる	61.8 <sup>④</sup>	61.0 <sup>④</sup>	61.5 <sup>④</sup>	42.1 <sup>④</sup>	51.2 <sup>④</sup>	45.9 <sup>④</sup>
14. トイレの閉閉音を発てる	63.4 <sup>④</sup>	73.6 <sup>④</sup>	64.4 <sup>④</sup>	43.8 <sup>④</sup>	51.2 <sup>④</sup>	45.8 <sup>④</sup>
15. 自宅で床を歩く音を発てる	71.1 <sup>④</sup>	65.7 <sup>④</sup>	77.1 <sup>④</sup>	41.3 <sup>④</sup>	57.1 <sup>④</sup>	47.8 <sup>④</sup>
16. 電話の音や話し声を発てる	56.2 <sup>④</sup>	61.9	58.5	19.0	26.2	22.0
18. 机やイスを動かす音を発てる	41.3	71.4 <sup>④</sup>	63.7	21.5	54.3 <sup>④</sup>	39.0
19. 布団たたきの音を発てる	45.9 <sup>④</sup>	65.1 <sup>④</sup>	75.8 <sup>④</sup>	16.5	44.0	27.8
20. 共有部分で立ち話の音を発てる	54.5	60.7	57.1	24.0	36.9	29.3
21. 共有部分で足音を発てる	52.1	54.8	53.2	19.0	34.5	25.4
3. プライバシー・テリトリー						
22. 他人の家のことについて、近所でちょっとした話題にする	40.5	41.7	41.0	18.2	26.2	21.5
23. 他人の家のことについて干渉する	14.9	7.1	11.7	9.1	7.1	8.3
25. 他人の家の玄関前の廊下で立ち話をする	25.6	32.1	28.3	9.9	17.9	13.2
26. 他人の家の玄関前の廊下に物を置いたり、汚す	11.6	8.3	10.2	5.8	6.0	5.9
40. 玄関前に出前のどんぶりなどを置く	40.4	31.0	42.4	17.4	14.3	16.1
41. 共有部分に自分の物を出す	12.4	14.3	13.2	5.0	9.5	6.8
44. 外廊下に植木鉢などを出す	5.8	2.4	4.4	0.0	0.0	0.0
46. 他人の部屋のなかを外から見してしまう	46.3	40.5	43.9	28.9 <sup>④</sup>	38.1	32.7
47. 自分の家のなかを外から見してしまう	36.4	31.0	34.1	11.6	19.0	14.6
4. 近所つきあい						
24. 近所の人を不意に訪問する	20.7	19.0	20.0	9.1	13.1	10.7
27. 表札を出さない	14.0	22.6	17.6	5.8	14.3	9.3
28. 近所の人を宗教に勧誘したり、物をセールスしたりする	5.8	14.3	9.3	4.1	8.3	5.9
29. 近所の人を買い物に誘う	19.8	20.2	20.0	3.3	7.1	4.9
30. よく顔を見かける人でもあいさつをしない	14.9	34.5	22.9	2.5	23.8	11.2
31. 自治会(管理組合)で行う作業に参加しない	24.0	20.2	22.4	12.4	9.5	11.2
32. 自治会の役員などではない	11.6	21.4	15.6	5.0	7.1	5.9
33. サークル活動に勧誘する	10.7	9.5	10.2	0.0	3.6	1.5
49. 宅配便を預かってもらう	44.8	17.9	36.1	23.1	7.1	16.6
5. モラル・ルール						
34. 自転車、三輪車、バイクを放置する	5.0	14.3	8.8	2.5	9.5	5.4
35. ごみ出しのルールを守らない	9.1	22.6	14.6	5.5	16.7	9.8
38. つばを吐いた、タバコの殻が捨てをする	4.1	9.5	6.3	1.7	6.0	3.4
39. 周辺の道路などに尿をする	3.3	10.7	6.3	1.7	7.1	3.9
42. 子どもが郵便受けにいたずらをする	1.7	20.2	9.3	0.0	17.9	7.3
50. 共有部分の掃除をしない	16.5	26.2	20.5	6.6	13.1	9.3

(\* P<0.05)

たことのある人の5割以上が、行うときに近隣の人に對して何らかの気がねを感じていることを示している。団地ごとにもみても、ほとんど同じ傾向を示しているが、団地間の比較では、B団地はA団地と比較して、やや行為率、気がね率とも高い傾向がみられる。これは、A団地と比較して統計的に有意な差はないが、B団地に就学前の住宅内部での生活時間の比較的長い6歳未満の最年少子のいる家族がやや多いことに関係していると思われる。

以上の結果から、相対的に音に係わるイベントは、自分自身で行うことも多く、また、行うときには気がねをしやすいイベントであること、そして前項3.1でみられた結果のように、他人の行うイベントとして最も経験しやすく、同時に最も困難さを感じやすいイベントであると言える。言い替えれば、騒音は、最もあって欲しくないイベントであるが、自分自身の生活上では出さざるを得ないイベントであるということである。すなわち、集住生活においては、避けがたいイベントであり、加害者にも被害者にもなりやすいイベントであると言える。

### 3.4 近隣ストレス・カテゴリ別発生率と反応率、及び迷惑行為率と気がね率

図3-2は、全体(N=205)、A団地(N=121)及びB団

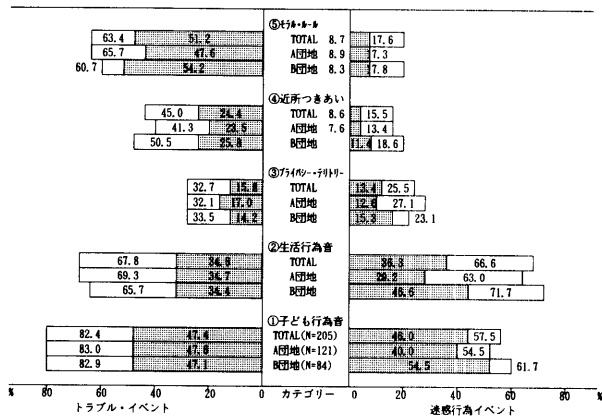


図3-2 カテゴリー別のトラブル・イベント発生率と反応率、及び、迷惑イベント行為率と気がね率

地(N=84)ごとの5カテゴリー別発生率と反応率、及び、迷惑行為率と気がね率を示している。「子ども行為音」「生活行為音」「プライバシー・テリトリー」「近所つきあい」及び「モラル・ルール」の各カテゴリーの発生率、反応率、行為率及び気がね率においてA団地とB団地との間には、統計的に有意な差は見いだされなかった。したがって全体(N=205)の結果についてみると、各カテゴリーのトラブル・イベントの発生率は高い方から、「子ども行為音」「モラル・ルール」「生活行為音」「近所つきあい」「プライバシー・テリトリー」の順となっている。そのうち「子ども行為音」「生活行為音」「モラル・ルール」が50%を超える高い発生率を示し、近隣で生じる主たるトラブル・イベントであることが改めて分かる。更に、発生率に対して反応率の占める割合をみてみると、発生率では3カテゴリー中で最も低い「モラル・ルール」が最も高いことが分かる。他のカテゴリーにおいては、反応率/発生率の割合は50%前後であるが、「モラル・ルール」は80%以上である。また、「モラル・ルール」の行為率をみると20%以下と低いことが分かる。したがって、イベントの実際の行為そのものは少なくとも近隣への心理的負荷が大きいイベントであると言えるであろう。

その他、特に「子ども行為音」は他のカテゴリーと比較して気がね率/行為率の割合が80%以上と顕著に高く、子どもから出る音は全体的に集住生活では気がねしながらも生活上避けられないイベントとして位置づけることができるであろう。

### 3.5 数量化理論Ⅰ類に基づく近隣ストレス総得点とカテゴリー別ストレス得点に対する個人属性、生活行動、住意識要因の寄与

図3-3~14は、A団地とB団地ごとに、「近隣ストレス総得点」と5カテゴリー別ストレス得点に対する「個人属性」(年齢、家族型)、「居住特性」(居住年、居住階、「地域生活行動」(近所つきあいの水準、近隣トラブルへ

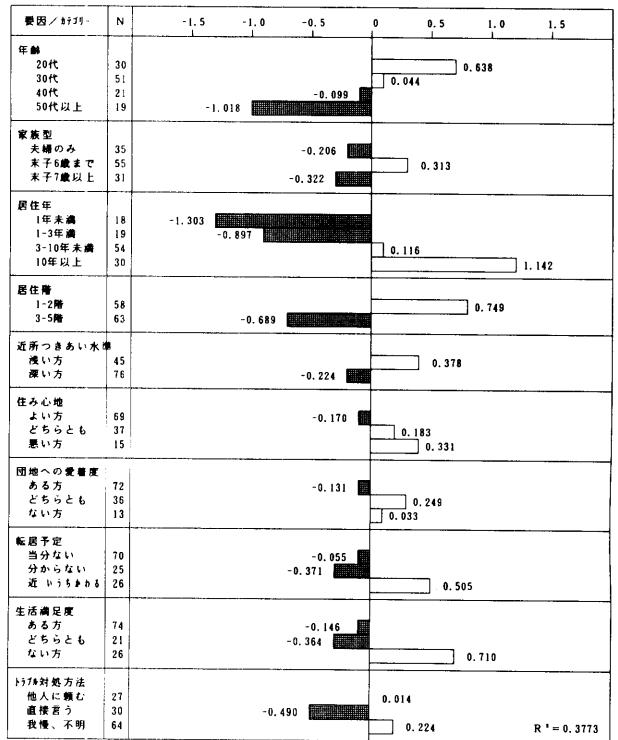


図3-3 数量化理論Ⅰ類に基づくA団地の「近隣ストレス総得点」に対する各要因の寄与(N=21)

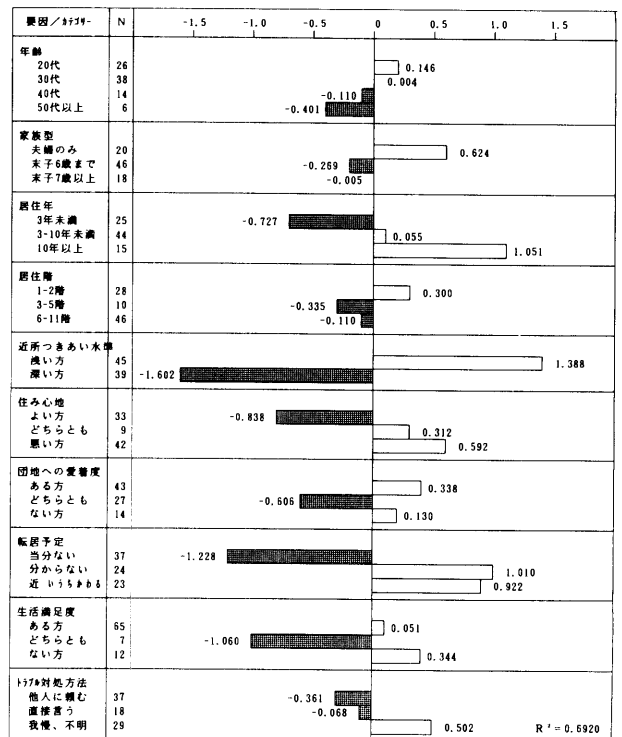


図3-4 数量化理論Ⅰ類に基づくB団地の「近隣ストレス総得点」に対する各要因の寄与(N=84)

の対処方法)及び「住生活意識」(住み心地、団地への愛着度、転居予定、生活満足度)の各要因の寄与(カテゴリースコア)を示している。一般的に、要因全体の決定係数は、0.2180~0.6920の範囲で高いとは言えない。

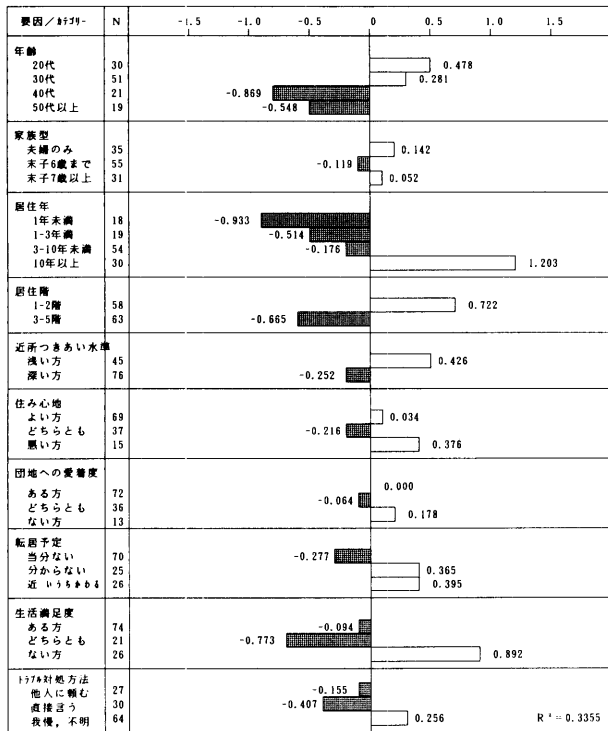


図3-5 数量化理論Ⅰ類に基づくA団地の「①子ども行為音」に対する各要因の寄与 (N=121)

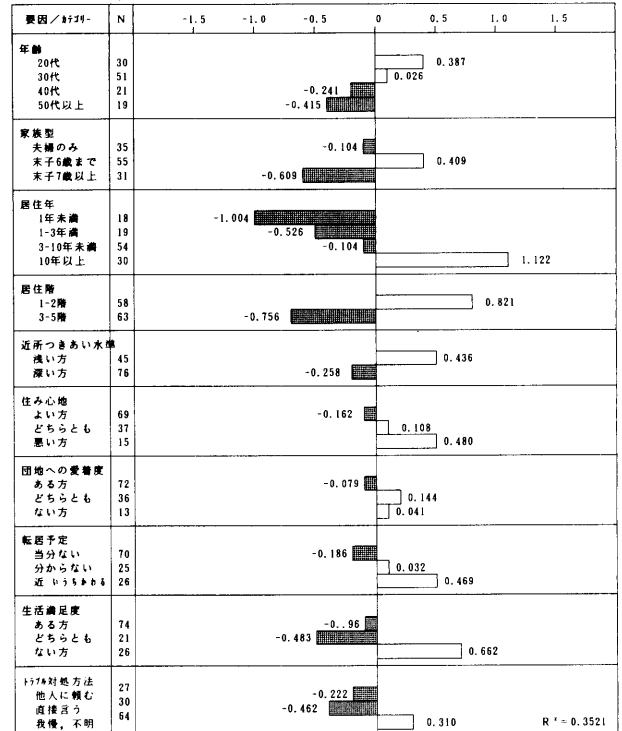


図3-7 数量化理論Ⅰ類に基づくA団地の「②生活行為音」に対する各要因の寄与 (N=121)

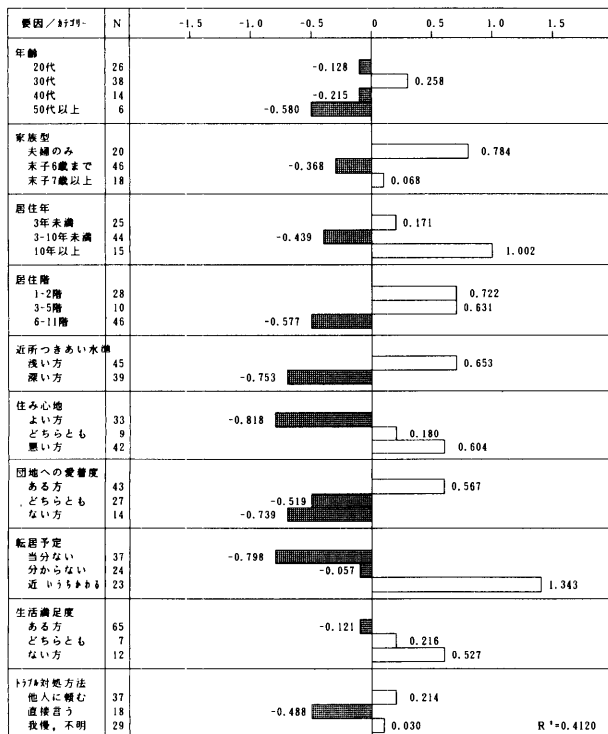


図3-6 数量化理論Ⅰ類に基づくB団地の「①子ども行為音」に対する各要因の寄与 (N=84)

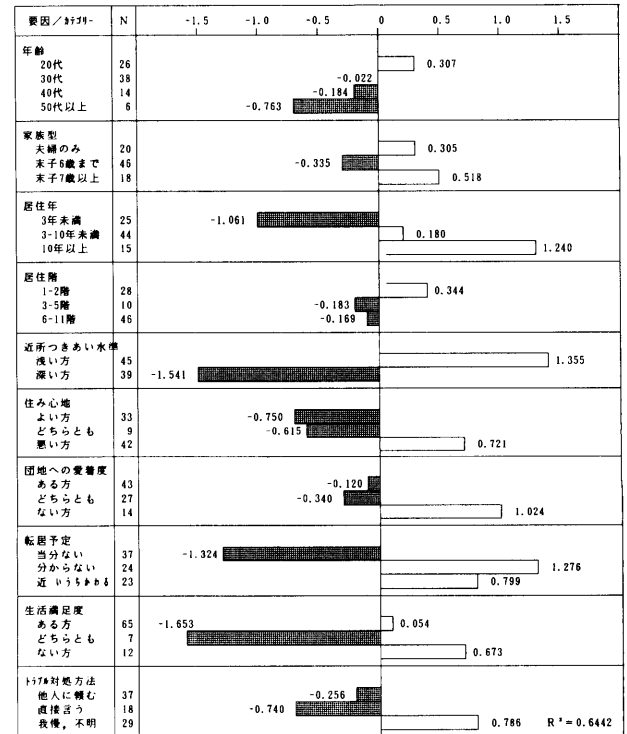


図3-8 数量化理論Ⅰ類に基づくB団地の「②生活行為音」に対する各要因の寄与 (N=84)

まず最初に、A、B団地の「近隣ストレス総得点」に対する各要因の寄与をみると、A団地(図3-3)では年齢、居住年、居住階の要因の寄与が特に高い傾向にあることが分かる。すなわち、「20代」は高く、「50代以上」

は低い傾向、居住年「3年未満」は低く、「10年以上」は高い傾向、居住階「1-2階」は高く、「3-5階」は低い傾向に寄与している。また、その他、生活満足度の「ない方」はストレスが高い傾向に、また、トラブルへの対処の際

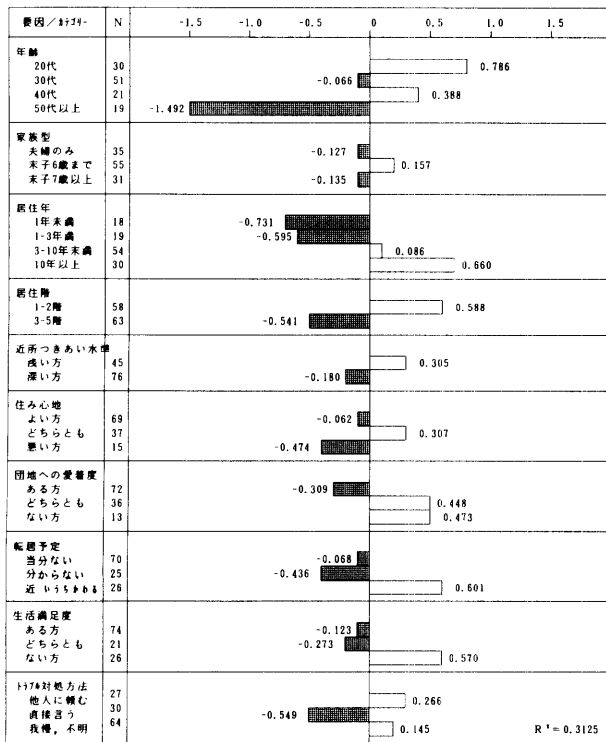


図3-9 数量化理論Ⅰ類に基づくA団地の「③プライバシー・テリトリー」に対する各要因の寄与 (N=121)

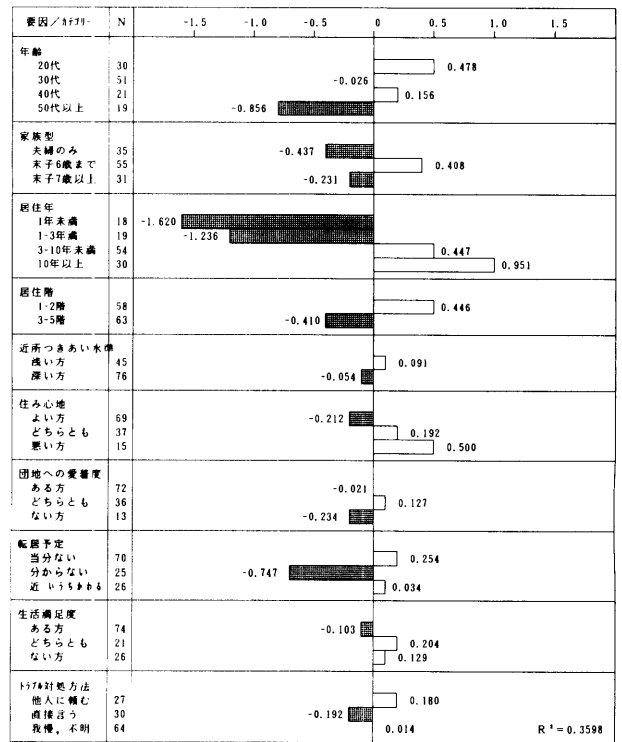


図3-11 数量化理論Ⅰ類に基づくA団地の「④近所つきあい」に対する各要因の寄与 (N=121)

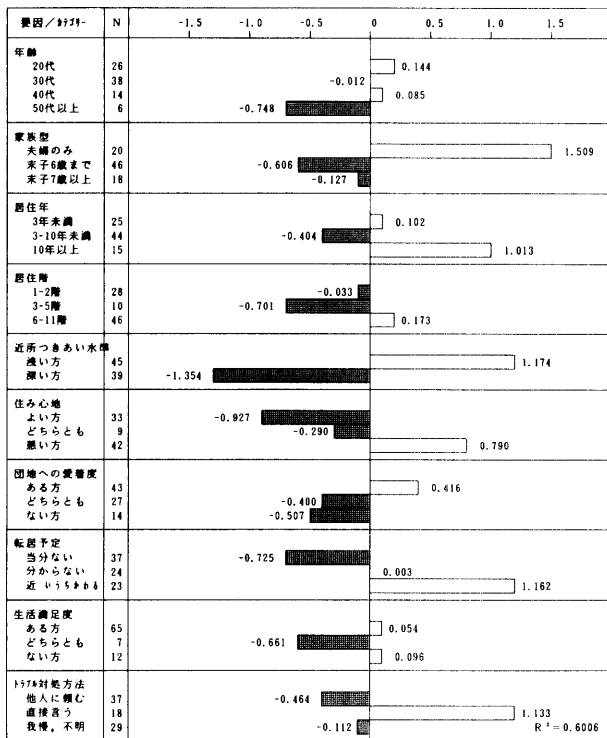


図3-10 数量化理論Ⅰ類に基づくB団地の「③プライバシー・テリトリー」に対する各要因の寄与 (N=84)

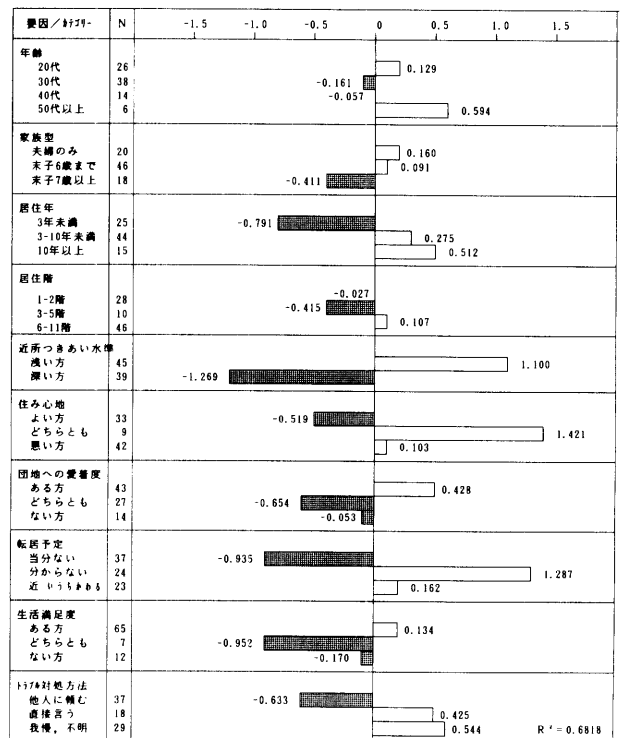


図3-12 数量化理論Ⅰ類に基づくB団地の「④近所つきあい」に対する各要因の寄与 (N=84)

は何か問題が生じたときには、「直接本人に言って問題を解決しようとする」は、ストレスが低い傾向に、また、何かあっても「我慢する、不明」は高い傾向に寄与している。

B団地(図3-4)では、寄与率に違いがあるとはいえ、ほぼA団地と同じ傾向が見える。特に、特徴的な傾向としては、近所つきあい水準要因と転居予定要因が比較的大きな寄与を示していることである。近所つきあい



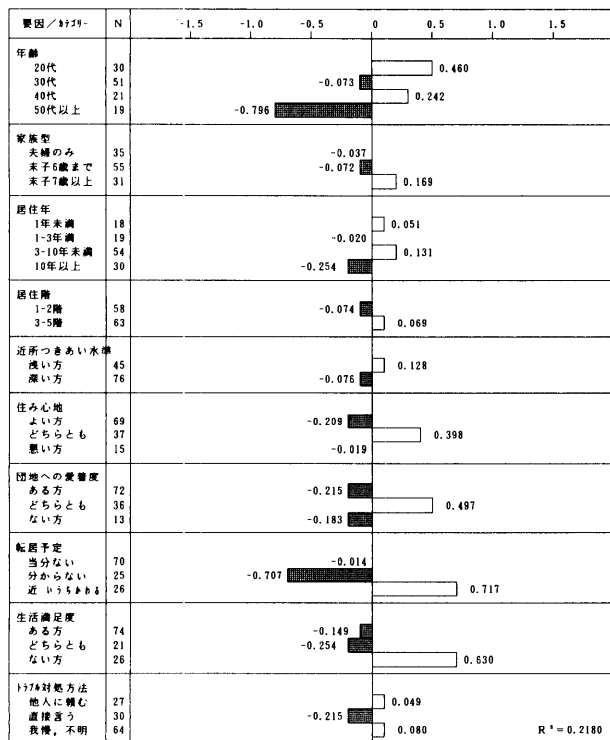


図3-13 数量化理論I類に基づくA団地の「⑤モラル・ルール」に対する各要因の寄与 (N=121)

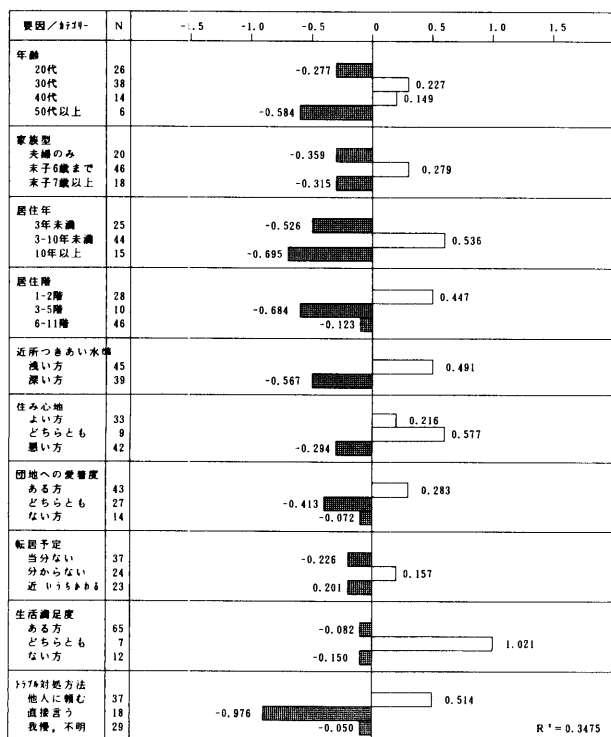


図3-14 数量化理論I類に基づくB団地の「⑤モラル・ルール」に対する各要因の寄与 (N=84)

の水準が「浅い方」はストレスが高い傾向に、また、「深い方」はストレスが低い傾向にあり、転居予定の「当分ない」永住傾向にあるものはストレスが低い傾向に、また、「近いうちかわる」は高い傾向にあった。また、家族

型の夫婦のみの家族はストレスが高い傾向にあった。全体的には、世代では50歳代で、居住年はある程度の長さ（10年以内）で、近所つきあいのレベルが深く、永住傾向があるものはストレスが低い傾向にあると言える。

次に、A、B両団地について、各要因ごとに5カテゴリ別ストレス得点に対する寄与をみとめる（図3-5～14）。まず年齢要因については、「20代」が両団地の生活行為音（図3-7と8）、A団地のプライバシー・テリトリー（図3-9）、近所つきあい（図3-11）及びモラル・ルール（図3-13）の得点が高い傾向に寄与している。一方「50歳代以上」は、B団地の近所つきあい（図3-12）を除いてすべてに対して低い傾向に寄与している。

居住年要因は、ほとんどすべてのカテゴリ別ストレス得点において、「3-10年未満以下」がストレスが低い傾向に寄与し、また、「10年以上」は高い傾向に寄与している。B団地のモラル・ルールにおいてのみ、「3-10年未満」が高い傾向に寄与しているのが例外的傾向としてみられる（図3-14）。

居住階要因は、A団地ではすべてのカテゴリ別ストレスにおいて「1-2階」が高い傾向に寄与し、「3-5階」が低い傾向に寄与している（図3-5、7、9、11、13）。B団地でも「1-2階」は、プライバシー・テリトリー（図3-10）、近所つきあい（図3-12）を除いて、高い傾向に寄与している。子ども行為音に関してのみ「6-11階」は例外的に低い傾向に明確な寄与をしている（図3-6）。全体的には、居住階の低い層は、近隣の出来事に多く出合う可能性があり、それだけにストレスを多く感じる傾向にあると思われる。子ども行為音への居住階の寄与の仕方は、その最も顕著なものであると思われる。

近所つきあい水準、住み心地、団地への愛着、地域への愛着と生活満足度では、一般的に、つきあいの水準「深い方」、住み心地「よい方」、愛着「ある方」、生活満足「ある方」が低い傾向に寄与し、逆が高い傾向に寄与している。また、転居予定の「近いうちかわる予定」は高い傾向に寄与している。このことは、現在の生活の場が比較的永続的なのか、それとも一時的なのかといった、場への係わり方がそこで体験するストレスの度合いに影響をもつ結果とも考えられる。

最後に、近隣でのトラブルへの対処方法では、B団地のプライバシー・テリトリー（図3-12）と近所つきあい（図3-10）を除いて、「直接言う」は低い傾向に寄与し、「我慢する」は高い傾向に寄与している。この傾向は、直接言えるということは少なくとも何か問題が生じたときに、相手に伝えれば何とか問題を回避できる、解決できていることであることであり、また逆に、我慢するのは言っても駄目だと思っていることで、ストレス研究の視点から考えると非常に興味深い。すなわち、上述の傾向

は、実際の生活のなかで、直接他者に言う経験があるかどうか、また、今後実際に言うかどうかに関係するのではなく、「直接に当事者に言えば何とかなる」という対処可能性の知覚という純粋に心理学的要因が関係している可能性を示すものであると考えられる。

以上数量化理論Ⅰ類による各要因の寄与について分析を行った。近隣ストレストラブル・イベントの総得点、カテゴリー別得点で表される心理的負荷の度合いに、近隣ストレスラーであるイベントそのものの性質ばかりでなく、個人の近隣の人間関係に対するあり方やトラブル・イベントへの対処に関する態度といった心理的・社会的要因が強い影響をもっていることが示唆された。

#### 4. 結語

近隣ストレス尺度構成のための基礎資料を得るためにタイプの異なる2つの集合住宅に住む専業主婦を対象(N=415)に質問紙法による社会学的調査を実施した。近隣ストレス暫定尺度(1993年版)を作成し、関連する幾つかの要因間の関係を、主に数量化理論Ⅰ類を使用して分析した。その結果、近隣ストレスを考える上で必要とされる幾つかの心理的、社会的要因が見いだされた。

しかしながら、本研究で見いだされた結果は限られた対象者についての分析結果であること、また、暫定的なストレス尺度を使用しているなどの理由で、まだ一般化することはできない。今後、ストレス尺度の構成についての研究を進め、より多くの関連要因との関係の把握を求めていきたいと思っている。最後になりましたが、ご多忙のなか調査に協力していただいた調査地域の住民の皆様から感謝する次第です。

#### <参考文献>

- 1) 山内宏太郎：家族と住環境ストレスに関する研究(1)－集合住宅の家族に関する分析，研究紀要，Vol.26，pp.13～30，白百合女子大学，1990
- 2) 山内宏太郎：集住生活と近隣ストレスに関する研究－近隣ストレス尺度構成のための予備調査－，研究紀要，Vol.28，pp.83～103，白百合女子大学，1992
- 3) 山内宏太郎，山本和郎，久田満：近隣騒音の心理社会的構造に関する研究，総合都市研究，Vol. 18. pp.65～87，東京都立大学都市研究センター，1983
- 4) 山内宏太郎，渡辺圭子：ライフサイクルと住環境ストレスに関する研究－家族型分類による分析，大会学術講演梗概集，pp.63～65，日本建築学会，1989
- 5) 山内宏太郎，渡辺圭子：ライフサイクルと住環境ストレスに関する研究(3)－集合住宅居住家族の住空間機能別分析，大会学術講演梗概集，pp.195-196，日本建築学会，1991
- 6) 山内宏太郎，渡辺圭子：ライフサイクルと住環境ストレスに関する研究(4)－集合住宅居住家族の住環境ストレスと近隣ストレス，大会学術講演梗概集，pp.453-454，日本建築学会，1992.
- 7) 渡辺圭子，山本和郎，石原邦雄，高橋博子，山内宏太郎：ライフサイクルと集合住宅に関する人間科学的研究－特に，幼児と高齢者のいる家族の場合(1)，研究年報，Vol.15，pp.195～206，住宅総合研究財団，1989
- 8) 渡辺圭子，山内宏太郎：集合住宅と家族に関する環境心理学的研究(2)－核家族におけるライフステージと住宅性能別トラブル，大会学術講演梗概集，pp.63～65，日本建築学会，1989
- 9) 渡辺圭子，山内宏太郎：家族と住環境に関する人間科学的研究－2.エムプティネストの住生活意識，大会学術講演梗概集，pp.193～194，日本建築学会，1991

#### <研究組織>

- 主査 山内宏太郎 白百合女子大学文学部 教授  
委員 渡辺 圭子 建設省建築研究所 主任研究員  
" 山本 和郎 慶應義塾大学文学部 教授  
協力 高木 紀子 白百合女子大学 研究生